

「むねいたきおもひ」考：『御津の浜松』最終巻読解のための覚書

辛島, 正雄
九州大学人文科学研究院文学部門：教授

<https://doi.org/10.15017/25251>

出版情報：語文研究. 111, pp.1-12, 2011-06-03. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：

「むねいたきおもひ」考

—『御津の浜松』最終巻読解のための覚書—

辛 島 正 雄

一 はじめに

かつて『御津の浜松』には、今日の文学史的評価からすると、過褒とも思われる賛辞がおくられたことがあった。それは、『無名草子』における扱いである。すなわち、『源氏』、『狭衣』、『寝覚』に続いて四番目に取り上げられると、まず、『

みつの浜松』こそ、『寝覚』、『狭衣』ばかりの世の覚えはなかめれど、言葉遣ひ、ありさまをはじめ、何事もめづらしく、あはれにもいみじくも、すべて物語を作るとならば、かくこそ思ひ寄るべけれ、とおぼゆるものにてはべれ。(二三五頁。以下、『無名草子』の引用は、『新編日本古典

文学全集』本による)

との総評があり、その具体的な内容について、登場する女性に即して言及がなされる。そして、最後に欠点を論つ段となつても、

げに何事も思ふやうにためたき物語にてはべるを、それにつけても、そのことなからましかば、とおぼゆるふしづしこそはべれ。……はじめよりよからぬものは、いかなることも耳にも立たず、いみじきにつけて、はかなきこともかくこそおぼえけれ。(二三八―三三九頁)

とあるように、すぐれた作品であることを強調したうえで、瑕瑾を指摘するといった底（い）のものなのであった。これを、同じ『無名草子』での『狭衣』評と比較するとき、そこには、

『浜松』びいき (三角洋一著『王朝物語の展開』二〇〇〇年、若草書房) 18 『無名草子』と物語文学史 二八〇頁に見える用語) とでも

呼びたくなる特異な好尚が現れているように思われるのであるが、その多くは、「中納言の心用ゑ、ありさまなどあらまほしく、この、薫大将のたくひになりぬべく、めでたくこそあれ」（二三三頁）、あるいは、「中納言、まめやかにてをさめたるほど、いみじ」（二三九頁）とする、主人公の造型への共感もたらしたものであるらしい（「狭衣」への総評は、「狭衣」こそ、「源氏」に次ぎては世覚えはべれ。少年の春は」とつちはじめたるより、言葉遣ひ、何となく艶にいみじく、上衆めかしくなどあれど、さして、そのふしと取り立てて、心に染むばかりのところなどはいと見えず。また、さらでもありなむとおぼゆることもいと多かり」（二三〇頁）というものであり、「さらでもありぬべき」とも「二三三頁」を列挙するさいも、「何の至りなき女のしわざと言ひながら、むげに心劣りこそしはべれ。……物語といふもの、いつれもまことしからずと言ふなるに、これは殊の外なることどもこそあめれ」（二三四頁）と容赦ない）。

ところが、『浜松』へのこのような高い評価は、この物語がその後たどった数奇な運命により、容易には納得しがたいものとなった。近世後期にこの物語は、他の多くのマイナーな物語がそうであったのと同様、国学者たちの間にも知られ、研究の気運も萌してきたよつではある（中西健治著『浜松中納言物語論考』二〇〇六年、和泉書院）第三章「浜松中納言物語研究史」を

参照。しかし、そのときの物語の体裁が、すでに通行の巻一から巻四までの、首尾を欠いたものであったため、物語の全貌を知ることが不可能となっていた。首巻そのものは、残念ながら、今日に到るも失われたまま、詳細を知るすべもないのであるが、最終巻については、昭和に入ってから、奇跡的に二本の存在が相次いで明らかとなり、そこには、最終巻にふさわしい、濃密な内容の盛られていることが明らかになった。この発見がなければ、『浜松』の読解は、いつまでも隔靴搔痒の状態を脱することが困難であったと想像されるが、こうして日の目を見た最終巻を読み解きながら、ここに到るまでの物語の展開相を丁寧に見直し・再確認してゆけば、散逸した首巻をも含めて、物語の目指そうとした世界がいかなるものであったかは、かなり鮮明になってくるように思われる。そうなるを期待されるのが、注釈書の整備ということになるのだが、最終巻まで備えたものとなると、叙上のような理由から、まことに寥々たるものなのである。もちろん、肝腎なのはその質であり、多ければよいというわけではない。だが、じつさいには、現行の諸注釈書と比較しても、いまだ解釈の定まらない、あるいは意見の分かれるところも少なくない。最終巻の読み解きかたいかんが、作品全体を理解のための最大のポイントだと考えるだけに、そこに不安要素を放置

しておくことは、研究の質を危うくすることでもあろう。

『浜松』の読解・研究は、松尾聰氏による「日本古典文学大系」本が昭和三十九年（一九六四年、岩波書店）に刊行されて以来、もっぱらこれに依拠する状態が続いてきた。松尾氏以前にも、宮下清計氏による「新註国文学叢書」本（昭和二十六年、講談社）がすでに出版されていた。しかし、ほどなく稀覯本となり、一般には普及しなかったことに加え、その後に出た「大系」本が、厳正にして揺るぎない態度で、委細を尽くした的確な注釈の施された、きわめて信頼度の高いものだったからである。それでも近年、池田利夫氏による「新編日本古典文学全集」本（二〇〇一年、小学館）と、中西健治氏の大著『浜松中納言物語全注釈上巻・下巻』（二〇〇五年、和泉書院）とが相次いで刊行されたことで、「大系」本頼みであった『浜松』の注釈史に、ようやく新風が吹き込まれることとなった。とはいえ、新しい注釈書の参入をもってしても、解釈上の問題は、なお少なからず積み残されているように思われる。

本稿では、『浜松』最終巻が、物語世界をトータルに把握するうえで特別な意味をもつとの見通しのもと、曖昧なまま解釈が定まっていらないように見える箇所を具体的に取り上げること、今後に資するべく、再検討を試みることにしたい。

二 問題の所在

現行『浜松』巻四は、七月二十一日の夜、方違えのため中納言が京に戻った留守中に、清水寺に籠っている吉野姫君をつけ狙う式部卿宮が、姫君を盗み出そうとして、

暮るるままには、式部卿の宮、例の、いとあながちなるさまにかまへて、「今宵かならず率て隠してむ」とおほして、おはしましぬめり。いかならむとぞ。（三七七頁）

以下、「御津の浜松」の引用は「新編日本古典文学全集」本によるが、私意により表記等を改めた場合がある。

というところでいったん打ち切られる。「いかならむ」との語り手の思わせぶりなことばでもって終わるこの巻末からは、その後の展開の詳細を知ることのできなかつたかつての『浜松』読者の切齒扼腕する姿が髣髴してくる。ともあれ、これを承けた最終巻では、姫君失踪の報せが中納言にもたらされるところから、物語が再開する。

以下、この巻を読みすすむなかで気づかされる顕著な特徴に、中納言の心中思惟が、繰り返し、次から次へと現れることが挙げられる。突然の姫君失踪という事態を承け、それを案ずる中納言の心中に密着した叙述が多くなるのは、当然と

いえば当然のことであるだろう。ところが、その執拗なまでの心理描写の積み重ねが次第に熱を帯びてくると、それ以前の数々とは異なった迫力をもって、読む者を物語世界に引き込んでゆくのである。

そして、姫君の行方を掴めぬまま、むなしく時間だけが経過したある月明の夜（八月十五夜であろうか）、中納言の夢に唐后が現れ、天上世界から中納言のいる日本に、女の身で転生する、と告げる。そして、日本への転生のために、「かうおぼしなげくめる人の御腹になむやどりぬるなり」（三九八頁）と、行方不明の吉野姫君の腹に宿ったというのである。

唐后に関しては、巻四において、同じ年の三月十六日の夜その天上世界への転生が、天の声によって中納言に知らされるという事件があったばかりだが、そこから一転、今度は、「われ（＝唐后）も人（＝中納言）も浅からぬあいなき思ひにひかれ」（三九八頁）た結果、唐后の日本への再度の転生となったわけである。中納言は、唐后がこの人間世界からたしかに去ったことを確認するいっぽう、自分が唐后のもとへの転生を願うのは当然としても、唐后のほうからこちらへ転生してくるとは思いも寄らないことであつたと、衝撃をもって受け止め、いまだ信じ難い思いであるのか、「明けぬれば、ところどころに誦経させせ、つねよりもおこなひ祈りつつも、

『またはこの世にいつかは（唐后と逢えようか、逢えはしまい）』と思ひつづくる」（三九八頁）のであつた。そして、そのよくなかれの思いは、おのずから、失踪した吉野姫君へと向かうそのあたりの本文を、池田利夫編『浜松中納言物語 五 広島市立浅野図書館蔵』（一九七二年、笠間書院）の影印によって示せば、次のようである。

……「この心我ころみだし給人も、

ことさまの契りのをはしけるよ」と、方々むねいたうくちおしう、「よそに思ひなさんとは思はざりしを」と、

「いかなる人のもとにおはすらむ。我よりほかにしる人もなき御みなれば、きういで尋しらぬ。我御心は

さらなり、たゞ、見ん人も、もてはなれず、うとかるまじきさまにいひなしてこそは、むつびよりて、むねい

たきおもひはたえずとも、せめてこそ思あつかひ聞えぬ。すべてことくおほえず、たゞ、ありつる夢より

のちは、いと心にかゝりて、とさまかつかさまに思ひ明し暮すよりほかの事なきに、……

（二六～二七頁。句読点・濁点等は私意による）

一読しただけでは、なにをいいたいのか直ちには理解し難

い文章であるのだが、その分かりにくさを実感すべく、まず、「大系」本で松尾氏が施した注釈を確認することから始めよう。厳密を期するため、また、松尾氏の真摯な注釈態度への畏敬の念をも込め、煩を厭わず、校訂本文と、そこに施された頭注と補注とを、すべて掲げる。あわせて、最終巻の注釈の嚆矢である宮下氏の「新註」本の頭注を、適宜補記した。

三 「むねいたきおもひ」は誰の思いか

……「この心我こころみだし給人も、異様の契りのをしけるよ」と、方々胸いたう、「くちおしうよそに思ひなさんとは思はざりしを」と、「いかなる人のもとにおはすらむ。我よりほかに知る人もなき御身なれば、きいで尋しらん、我御心はさらなり、たゞ、みんなも、もてはなれず、うとかるまじさまにいひなしてこそは、むつびよりて、胸いたきおもひは絶えずとも、せめてこそ思あつかひ聞えぬ」すべて異事おぼえず、たゞありつる夢よりのちは、いとゞ心にかゝりて、とゞさまかうづさまに思ひ明し暮すよりほかの事なきに……（四〇三頁）

二四 「この心」は不審。「このころ」の誤りか。補注八五二。「新

註 本「此の心即ち我が心。」

八五二 宮下氏は「此の心即ち我が心」と解かれるが、そのように並べる必要があったか、疑わしい。強いて考えれば、むしろ「この心」とだけあった本文に傍注として後人が「我心」と付けたのが本文に竄入したとでも見るべきか。あるいは、「このころ」が「下の」「我こころ」にまでわかれて、「このころ」と誤写されたというふうなことも考えられるが、「ここに」「この頃」が必要なことばとも考えられないから、可能性はかなりとほしい。その他、「この心」を「唐后の心」と解いて、唐后が異父妹のことに心を乱していたと考えることも、ある程度可能性はあるうか。

二五 私の心を乱しなざる人（吉野姫）も、（私とは結ばれないで）ちがった人の妻となる前世の約束が自分になったんだなあ。「新註」本「我が心を乱し給ふ吉野姫も自分とは格別の深い因縁があたりだつたよ。」

二六 あれやこれやと。「新註」本「何やかやと。」

二七 吉野姫を他人のものとも強いても思つようには思っていないかつたのに。「新註」本「残念にも姫を他人のものと思はねばならぬやうにならうとは思ひもよらなかつたのに。」

二八 補注八五三。「新註」本「と」は或は誤入か。」

八五三 会話又は心中語を「と」で承けたものが、いくつか並んで、最後の「と」につづく用言にそれぞれかかってゆく語法はあるが、ここでは次の「心中語」につづく地の文が不備なので、ただちにそうした語法とみるわけにもいかない。「と」はあるいは「今」の草体の漢字の誤写か。

二九 姫は今頃どんな人のところにいらっしやるのだらう。私以外に

は(姫を)知る人もない姫の御身なのだから。 補注八五四。

「新註」本「自分以外には吉野姫を知つてゐる人はないから。」

八五四 「我よりほかに云々」は、前に「此の人よりほかのしる人や
は我が身にある、とひたふるに身をまかせて」とあるのを参照
すると、「私を知っている以外に、他人で知っている人もない
姫の御身だから」の意とも解けよう。(ただしその場合は「知
り給ふ人」とある方が穩当ではある。)

三〇 「尋ねしらん」の下に相当長い(少くとも一行分ぐらいの)脱
文があるか。 補注八五五。「新註」本「聞き出して尋ね知らう
としても。この下に」^二「^一こても見つけ出すことは難しいであらう云々」
といふやうな意味の脱文があるのではあるまいか。」

八五五 「きゝいで尋ねしらん」(姫のことを聞き出して、詮索して
知らうとする)の次に、底本も尾上本も「に」があつて、見せ
けちにしている。あるいは、「尋ねしらんに(脱文)」又は「尋
ねしらん(脱文)」の形であつたものを、後人がさかしらに
削つたのか。「尋ねしらん」又は「尋ねしらんに」の次には、
「方策がないはずなのに、どうしてさがし出したのだから。姫
を迎え入れたその男の邸では、姫は従順な人だから、その男に
あまりつれなくもしないで」といったような叙述でもあつたが、
三 補注八五六。「新註」本「姫御自身は云ふまでもなく、相手
の男も親しく疎遠でない様子にうまく云ひつくろひ、睦び寄つて、
良心の苛責は絶えず受けても、強ひて大切にもてなし申し上げて
ゐることであらう。」

八五六 (いちまの)の通解——姫御自身のお心は(男の心に従う)と
とは(いうまでもない、)姫を(見るであろう人(相手の男)
も、)元來、姫とは縁つづきだとか、親しい家のつきあい關係

だとか)かけ離れた關係ではなくて、当然疎遠であるはずがない
よふなふに、ひたすらこしらえて言つては、親しみ近よつ
て、(姫が完全に心を許すわけではないので)胸がいたむ思
いは絶えないとしても——強いて(姫を)大切にお世話し申し
上げることであらう。以上「我が御心はさらなり」を「男の
心に従うことについては」の意としたが、姫の心をそう割り切
るのには疑問がある。「さらなり」の次に、脱文を想像すべき
かとも思われるが、「我が御心はさらなり」は「みん人も」と
並んでいるよつであるから、やはりそのまま下に続けて解くべ
きなのであらう。「もてはなれず云々」についても、もちろん
別様の解もあり得よう。「胸いたきおもひは絶えずとも」を宮
下氏は「良心の苛責は絶えず受けても」と解かれる。「良心の
苛責」を「胸いたきおもひ」という詞で表現するかどうかはし
ばらく措くとしても、こうした場合すぎ者が良心の苛責を覚え
るかどうかが問題であらう。

三三 次に「と」脱が。

三三 他の事は感じられないで。「新註」本「他のこと。」

三四 先ほどの夢以後は、(姫のことが)いっそう心にかかつて、あ
れやこれやと考えて夜を明かし日を暮らすより外のことはないの
に。

二〇〇字ほどの、「大系」本で七行という短文に、頭注が
十一箇所、補注がさらに五箇所施されていて、ここに費やさ
れた注釈の量の多さにも、この一節の晦渋であることを窺い
知ることができよう(また、「新註」本と並べると、「大系」本が、

宮下氏による簡潔ながら的確な頭注を十分に踏まえて、さらに解釈の厳密を期したものであることが理解できる。これを承けて、はじめ全文の現代語訳を提供した池田氏の「全集」本が、同じくだりについてどのように対処したか、こちらでも確認しておこう。校訂本文・現代語訳・頭注の順に掲げる。

三 ……このころ、わが心乱し給ふ人も、ことざまの契りのおはしけるよと、かたがた胸いたう、口惜しう、よそに思ひなきむとは思はざりしをと、いかなる人のもとにおはすらむ、われよりほかに知る人もなき御身なれば、聞き出でてたづね知らむ。わが御心はさらなり、ただ、見む人も、もて離れず、うとかるまじきさまに言ひなしてこそは、むつび寄りて、胸いたき思ひは絶えずとも、せめてこそ思ひあつかひ聞こえぬ。すべてことごとおぼえず、ただありつる夢よりのちは、いとど心にかかりて、とざまかうざまに思ひ明かし暮らすよりほかのことなきに、…… (三九八、三九九頁)

……近頃自分の心をお乱しになる姫君も、ほかの人と結ばれる因縁がおりになったのだよと、あれやこれやと胸が痛く、悔しいことに、姫君を他人のものと見る羽目にならうとは思わな

かったのにと、一体どんな人の所に今おいでか、自分よりほかに知る人もいない御身の上なので、自分こそが聞き出し、探し出して居所を知らうよ。姫君御自身のお心は言うまでもなく、現に一緒にいる男も、姫君を粗略には扱わず、親身になつうまく言いくるめ、馴れ馴れしく寄り添って、気がとがめる思いは絶えないとしても、つとめてお世話申し上げているであらう。一切ほかのことは思い浮ばないで、ただもう先日夢を見てより以後は、姫君のことがますます気になって、ああでもあらうかこうでもあらうかと考えて夜を明かし日を暮らすよりほかのことはないでいると、……

三 底本、尾上本とも「この心」。下の「わが心」に続けて「この心(すなわち)わが心」と強調した表現と強いて受け取れないこともないが、仮名表記「このころ」の誤写かと改めた。

四 底本、尾上本とも「尋しらんに」とあり、「に」を見せ消す抹消している。下文とのつながりが不自然なので、「こに」、「探し出したいが、方策のないまま過ぎるうちにも、姫君が他の男といるのがいまいましい」とでもいう内容の脱文が想定されるか。

五 「うとかるまじきさま」を、「見む人」(現に姫君を世話している男)の親身な応接の意としたが、二人が親しくなっている血縁・地縁など、あることないことを持ち出していると思像しているのかもしれない。『源氏』、薫、「私にはあなたと同じく父親もなく」さすがにたづきなくおぼゆるに、(大君を)うとかるまじく頼み聞こゆる。

両者を見較べると、「全集」本は、おおむね「大系」本の読みを踏襲したものであることが分かるが、「胸いたき思ひは絶えずとも」を「気がとがめる思いは絶えないとしても」と訳している点については、「大系」本補注が疑問を呈した。「新註」本の説に従ったものようである。また、不審をひとつ指摘すれば、「大系」本と「全集」本がともに、「きゝいでゝ尋しらん」とある底本について、尾上本同様「尋しらんに」とあり、「に」を見せ消ちになっている、と注記していることが挙げられる。ここは、影印を見るかぎり、そのようになつてはいない（小松茂美著「校本浜松中納言物語」一九六四年、「玄社」七一頁をも参照）。それはそれとして、この前後の文章が解釈に窮するものであることは、「大系」本・「全集」本（遡って「新註」本も）が揃って指摘するところであり、ともに脱文を予想するのも、文章の流れがあまりに汲み取りにくいからである。

ところで、「大系」本・「全集」本（遡って「新註」本も）での解釈には大差がないものの、じつは、どうにも釈然としない箇所がある。「むねいたきおもひはたえずとも、せめてこそ思あつかひ聞えめ」とあるところである。とくに後半の「せめてこそ思あつかひ聞えめ」について、「強いて（姫を）大切にお世話し申し上げることである」（「大系」本）、ある

いは「つとめてお世話申し上げているであろう」（「全集」本）と、いずれも主語を「見ん人」とするのであるが、これはいかであるつか（中西氏の「全注釈」でも、「見つけた者も……ひたすらお世話申し上げているのだらう」と口語訳する。「全集」本のような訳になるには、本文を「せめてこそ思ひあつかひ聞こゆらめ」とでも改訂しなければなるまいし、そもそも「せめてこそ思あつかひ聞えめ」の語勢からは、素直に読めば、推量ではなく意志と取るのが自然であろう。「こそ」と「聞ゆ」を省けば、「せめて思あつかひむ」である。だとすれば、主語は「見ん人」ではなく、心中思惟の主体たる中納言であろう。

ならば、中納言は、なにを「思あつかひ聞え」よつと考えているのか。あらためて、そこに到る表現を確認すると、「吉野姫君は（我（＝中納言）よりほかにしる人もなき御みなれば、きゝいでゝ尋しらん。我（＝姫君の）御心はさらなり、たゞ、見ん人（＝姫君を盗み出した男）も、もてはなれず、うとかるまじきさまにいひなしてこそは、むつびよりて、むねいたきおもひはたえずとも、（私＝中納言は）せめてこそ思あつかひ聞えめ」となっている。

この時点で中納言がもつとも恐れているのは、吉野姫君を永遠に手もとから失うことである。姫君が何者かに盗み出さ

れ、すでにその男と男女の契りを結んだであろうことは、中

納言も認めている。それでもなお、ほかの男の掌中にあることを承知しつつも、中納言は姫君を失いたくないのだ。そのためには、どのようにすればよいか。中納言が今後世話を焼くことに、姫君が難色を示すことはないだろう。「我よりほかにしる人もなき御み」だからである。だとすれば問題は、「見ん人」との関係いかんということになる。「見ん人」が誰であるかが分かつて、かれが姫君を匿つたまま中納言に会わせることを拒否すれば、姫君が中納言のもとに戻ってくることはない。そこで中納言が考えたのが、「たゞ、見ん人も、もてはなれず、うとかるまじきさまにいひなしてこそは、むつびよ」ること、なのであった。中納言と姫君が「もてはなれ」ない関係にあることはいうまでもないが、「見ん人も」また自分と疎遠ではない関係であるように言い做して、中納言との間に親交が成立すれば、ふたりへの奉仕というかたちで、姫君は中納言のもとに戻ってくる。ただし、それは、「せめて」する奉仕であり、「むねいたきおもひ」の絶えないものとなるはずだが、そのような思いをしてでも中納言は、姫君を取り戻したいのである。「むねいたし」の語は、気づけば、問題とした一文のはじめにも「方々、むねいたう、くちおしう」と見え、これが中納言の思いであることに、疑問の

余地はなかった。

四 「むねいたきおもひ」の意味するもの

こつした中納言の思惟は、いかにも異様なものに映る。だが、『浜松』最終巻においては、ほぼ同様の中納言の思いが、繰り返し描かれている。まず、吉野姫君の失踪を知った直後、中納言は早速、こんなことを考えている。

たれにても、この人（吉野姫君）をうち見る人の、よろしう思ふべき（姫君の）人ざまならねば、御身口惜しうてはおはせじ。われこそ（姫君と）契りなきことに思ひわび、涙の淵に浮き沈みつつも、……（姫君とともにいること）こよなうなくさみて世を過こしつれ。女は、いみじけれど、（男との）まことの契りに心寄り果てて思ふことなれば、われそぞろなりし人と思ひ棄てて、……

（三八四頁）

誘拐された姫君は、よもや男から粗略に扱われることはあるまいから、男との愛欲に溺れるようになれば、契りを交わすことのなかった自分のことなど、思い出そうともしないだろう、と想像しているのである。吉野聖の警告に従い、姫君とは禁欲的に接してきた中納言にとって、今回の事件は、いか

ばかりの痛恨事であつたか。そのことに同情できるか否かは、読む者の中納言への共感や思い入れの深浅にかかつていよう(さすがの「無名草子」も、こつした中納言の態度に、いささか辟易の気味が感じられるが……)。

こつした思いを、中納言の妄想と一笑に付すことはたやすい。しかし、かれは真剣である。姫君を誘拐した男への妬ましさを募らせながらも、「人間きはものぐるはしきやつなれど、いかでかたづね出でて、取り返してしがな」(三三七頁)と焦慮する。

その後も中納言は、吉野姫君が残した手習を見ながら、「これをよそ人のものに思ひなしてむよ」と思ふに、胸苦しう、口惜しきことかぎりなし」(三九六頁)と、堪え難い思いを噛み締める。そして、今宵、月を愛でたりすることもなく、男と「すきまなくてこそ寝給ひぬらめ」と想像し、「心やましきことかぎりな」(三九七頁)い精神状態でまどろんだ夢に現れたのが、唐后であつた。問題にした一節は、それに続くものである。

ここまで、読者は、まさに中納言の独り相撲につき合わせている感がある。巻四巻末には、式部卿宮が吉野姫君を「今宵かならず率て隠してむ」と画策していることが明示しており、読者にとって、姫君を盗み出したのが宮であること

を疑う余地など、どこにもない。にもかかわらず中納言は、「関白殿の君達」(三八四頁)や「大い殿の三位の中将」(三八六頁)といった別人に、疑いの目を向ける。もちろん、式部卿宮も犯人候補に挙がってはいるのだが、けつきよくのこころ、巻四において、宮への警戒をあれほど姫君に促していたにもかかわらず、最終巻での中納言は、なぜか宮を除外したまま、姫君誘拐の犯人探しをしているのである。

こつした不可解な物語の展開は、しばらく触れられることのなかつた式部卿宮の動静へと話題が転じられたことで、ようやくにして空転から脱し、吉野姫君の扱いをめぐる緊迫した局面を迎えることとなる。姫君は、中納言のあらぬ想像とは裏腹に、宮のもとに隠し置かれたのちも、けつして宮に心開くことなく、衰弱の一途をたどつた。心配しつつもなすすべのない宮は、姫君が息の下に、最期に会いたい人として「中納言に告げさせ給へ」(四一〇頁)と言つのを聞いて、中納言に非常を知らせる文を遣わした。その使者が到着する直前、姫君と過ごした乳母の家で物思いに耽る中納言は、次のように思いをめぐらしている。

……「吉野姫君が」世におはせぬやつあらじ。聞きつけ
ては、また(姫君が)いかなる人のもとにおはすと、
もとより離れぬゆかり、われのみこそ。知るべき人など

たづね寄らむも、吉野山の聖よりほかは、この人（「姫君」の御ゆくへ知る人なければ、疑ひおきて思ふ人、たれかはあらむ。なほ迎へ取りて、いかなるさまなりとも、われ思ひあつかひてこそ、なほ朝夕おぼつかかなからず見るに、心もなぐさまめ」と思ひつづくるに、なぐさむを、「われはかく思ふとも、さすがなる心の鬼添ひ、まことのけ近き契りのかたに心寄り果てて、」（中納言は）あらぬそそるなる人ぞ」など教へたてられむこそ、いみじく口惜しう心憂かるべけれ。（姫君は）心うつくしう、らうたげなりし人なりしかば、さも思はずやあらむ。かく誘ひかくしたらむ（「かくしたらむ」を「全集」本では「かへしたらむ」とする。「大系」本・中西氏『全注釈』も同様）が、影印では「かくしたらん」と判読でき「四九頁三行目」、それに従う。小松氏「校本」でも、「かくしたらん」と翻字「七二頁」する）人も、（姫君とは）いとえうちとけずやあらむ（なお、尾上本は「かく誘ひかくしたらむ人も、いとえうちとけずやあらむ」の本文を欠く。目移りによる脱落である）「など、ただことごとくなう、明け暮れ過ぐる日数にも、起き臥し思ふよりほかのことなくて、……」（四一三―四一四頁）

吉野姫君はどこかに無事ではいるはずだから、誰が盗み出したにしろ、なんとかその居場所を突き止めて、迎え取りたい。

姫君には、自分しか頼る人はいないのだから。姫君がどのような状態にあると、迎え取ることができれば、毎日その世話を焼きながら、姫君のことで気を揉むこともなくなるだろう。もつとも、姫君が、盗み出した男との契りに満ち足りて、自分のことなど歯牙にもかけなくなっているようだと言いが、姫君の素直で可憐な人柄からして、相手の男も、いまだ契りも交わせずにいるかもしれない——こんなことばかりを中納言が考えていると、……。

一見して、さきに問題とした一節と、非常に近似した内容であることが知られよう。さきには、「たゞ、見ん人も、もてはなれず、うとかるまじきさまにいひなしてこそは、むつびよりにて、むねいたきおもひはたえずとも、せめてこそ思あつかひ聞えめ」とあったが、ここでは、「聞きつけては、またいかなる人のもとにおはすと、……なほ迎へ取りて、いかなるさまなりとも、われ思ひあつかひてこそ、なほ朝夕おぼつかかなからず見るに、心もなぐさまめ」とある。男と一緒にあつてもかまわない、どんなかたちでもよい、なんとしても吉野姫君を取り戻し、自ら「思ひあつかひ」たい——中納言の思いは一貫していて、まったくぶれるところがないのである。

その後、中納言は、式部卿宮の呼び出しに応じて、参内、

衰弱しきつた吉野姫君と再会すると、その場で采配を揮い、宮の承諾も待たず、姫君を乳母の家へと引き取った。まずは、中納言の望んだとおりには推移したのである。ただし、中納言の「むねいたきおもひ」なるものも、ここまででは、かれの想像としてあるにすぎなかった。むしろこれからが、仮借ない現実と向き合いながら、「むねいたきおもひ」を味わい尽くす本番なのであり、そこにこそ主人公たる中納言の真骨頂が見出されるはずである。(二〇一一年五月稿)

〔注〕 大槻修編『平安後期物語選』(一九八三年、和泉書院)所収「浜松中納言物語」(三角洋一校注)には、「我よりほかにしる人もなき御みなれば」以下について、次のような頭注を施している。

大意、中納言をしか知らない姫君が、男から今までのことを聞き出され、中納言のもてあつかいをあげつらわれたら、どう思い驚くだろう、男は口上手に言いなびかせたことだろう、姫君とのいきさつを知った男の口封じのためにも、姫君を大切にお世話しよう。(三二一～三三頁)

「男の口封じ」云々の解釈がよく分らないが、「姫君を大切にお世話しよう」というのが「せめてこそ思あつかひ聞えぬ」の訳に当たるものであれば、私見とほぼ同じだということができる。

(からしま まさお・本学教授)